



連載Ⅱ
当財団専門委員

わたしの1冊
第7回

北海道大学公共政策大学院 特任教授 小磯 修二

『Governing the Commons』

Elinor Ostrom Cambridge University Press, 1990年

本書は、2009年に女性で初のノーベル経済学賞を受けたエリノア・オストロムの代表作である。コモンズについて、政府による規制でなく、市場原理でもない、コミュニティの自治によりコモンズ統治の可能性と成功のためのポイントが、膨大な実証調査を踏まえて示されている。

コモンズについては、1968年に「サイエンス」に発表されたハーディンの「コモンズの悲劇」がよく引用される。共用の放牧地ではたくさんの人が多くの牛をそこに放牧してしまうことで、草がなくなつて、放牧された牛は死んでいくという悲劇を紹介したものだ。人間は、自分に都合のいいように行動し、市場原理の下でコモンズは悲劇をもたらすというハーディンの考え方は、公害等の環境問題を理解する論理として受け入れられ、急速に広まっていた。

このハーディンの提起したコモンズ論に対し、エリノア・オストロムは、水資源、漁業資源、森林資源など人や組織が共同で利用し管理する「共有資源」(Common-pool Resources)について、世界中の事例を丹念に収集、分析し、それらは当事者が自主的に適切なルールを決めて、安定的に統治していく可能性のあることを理論的に示していた。悲劇を生まないコモンズが成り立つことを明らかにしたのである。

私は地域開発政策を専門にしているが、地域開発政策の主題は地域の限られた資源を、有効に活かし、その潜在力を發揮して

いくための方策、戦略を探ることである。しかしそこでの大きな課題の一つは、資源の持つ価値を顕在化していくことを阻む、排他独占の仕組みの存在である。特にわが国では土地の排他的利用は大きな問題となっている。都市問題の多くは、重層的な土地利用の実現によつて解決されることがある。このような中で、排他の論理を打破し、超えていく共生の概念としてのエリノア・オストロムのコモンズ理論には、大きな魅力と可能性を感じたのである。

本書との出会いを契機に、私が研究代表となり2008年から環境コモンズ研究会を立ち上げ、コモンズ研究に取り組んできている。北海道苫小牧市における広大な緑地での実践的なコモンズ活動を素材にして理論的な検討を進めるとともに、国内外のコモンズ事例を幅広く調査して、2014年には北海道大学出版会から『コモンズ 地域の再生と創造』(共著)を発売した。昨年はエリノア・オストロムのコモンズ理論に関心を持つ韓国の研究者グループと一緒に北大でコモンズフォーラムを開催するなど、コモンズ研究活動を続けてきている。

ところで、『Governing the Commons』には残念ながら邦訳が出ていない。4年ほど前に日本語への翻訳に挑戦しようとしたのだが、すでに他の研究者が申請しており実現しなかった。一日も早く日本語での翻訳本が出ることを期待している。

(こいそ しゅうじ)



小磯修二(こいそ しゅうじ)

北海道大学公共政策大学院特任教授。京都大学法学部卒業。旧国土庁、北海道開発庁(現・国土交通省)を経て、1999年に釧路公立大学教授、2008年から同大学長。2012年9月から現職。地域政策研究の分野において、実践的な研究プロジェクトを数多く実施。中央アジア地域などで国際貢献活動にも従事。専門は地域開発政策。公職として、国土審議会専門委員、北海道観光審議会会長、北海道国土強靱化計画有識者会議座長など。主な著書は、『地方が輝くために』『コモンズ 地域の再生と創造』『地域とともに生きる建設業』など。